慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	苗村丈伯の著作について
Sub Title	
Author	石田, 礼以菜(Ishida, Reina)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.75- 89
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0075
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

苗村丈伯の著作について

石 田 礼以菜

一、はじめに

つた。また、苗村丈伯の特徴として、井上和雄氏の「女重宝」の作家によって樹々な『Janasa オート・トート・リストの作家によって樹々な『Janasa オート・トート・リスト 師によって描かれたものであることが挙げられる。具体的に の筆意である」とあるように、 対して男重宝記を作れと」とあるように、当時よく売れ、それ 五冊は世の重宝として梓に鏤め摺写する事いとまなし希は是に 表作である『女重宝記』は、その続編ともいえる、元禄六年 品を著した。この人物は現在ではあまり知られていないが、代 暦・医学・往来物・武家故実・年中行事などの様々な分野の作 記』を始めとして、辞書・浮世草子・注釈・節用集・年代記・ (一六九三年) 刊の、男性の教養のための辞書である『男重宝 (一六九二年) 刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝 (筆者注:苗村丈伯) の著述中の挿画のある分は、皆悉く同一 苗村丈伯は、江戸時代前期の京都の作家である。元禄五年 | 『浮世絵』 序に、「書林某来りて嘆美して日余が嚮に作れる女重宝記 第一六号 (浮世絵社 一九一六年九月) に、「彼 彼の作品の挿絵は、全て同じ絵

は、現在、苗村丈伯作であると考えられる作品のうち、挿絵がは、現在、苗村丈伯作であると考えられる作品は一六作品(挿絵がごく小型かつ少数であり絵師不明の三作品を除く)であるが、そのうち一作品に、江戸時代前期の三作品を除く)であるが、そのうち一作品に、江戸時代前期の三作品を除く)であるが、そのうち一作品に、江戸時代前期の三作品を関係の深い作家であると考えられるが、吉田半兵衛は、その他にも、江戸時代前期の作家である井原西鶴などの多くの作家と関わりがあるので、苗村丈伯についての研究は、江戸時代前期の出版界を知る上で意義のあることであるといえる。

武士の礼儀作法について記載した故実書である『武家重宝記』一九四〇年一一月》、同じく、元禄七年(一六九四年)刊の、一九四〇年一一月》、同じく、元禄七年(一六九四年)刊の、方を記載した作者不明の語学書である『浮世鏡』との内容の共方を記載した作者不明の語学書である『浮世鏡』との内容の共方を記載した作者不明の語学書である『浮世鏡』との内容の共方を記載した作者不明の語学書である『浮世鏡』との内容の共方を記載した作者不明の語学書である『武家重宝記』する文献を紹介し、後半で、方言研究の観点から、『男重宝記』する文献を紹介していて記載した故実書である『武家重宝記』する文献を紹介していて記載した故実書である『武家重宝記』する文献を紹介していて記載した故実書である『武家重宝記』する文献を紹介していて記載した故実書である『武家重宝記』する文献を紹介していて記載した故実書である『武家重宝記』する文献を記載した故実書である『武家重宝記』

集委員会『日本古典文学大辞典』第四巻(岩波書店 一九八四 の最も新しい見解が示されているのは、日本古典文学大辞典編 会 一九七五年三月)などであるが、現在、 村丈伯—」『国文白百合』第六号(白百合女子大学国語国文学 考察した、市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と苗 集めた仮名草子である『理屈物語』 発見など―」『書物展望』第一一三号(書物展望社 大田栄太郎氏の「重宝記類と苗村丈伯 などの、苗村丈伯作であると考えられる作品を複数紹介した、 一月)、寛文七年(一六六七年)刊の、和漢の有名な問答を 「苗村丈伯」項 (市古夏生氏解題) である。以下に、その の作者は苗村丈伯であると (道益)—武家重宝記 苗村丈伯について 一九四〇年

> 綱目 につい としては、『徒然草絵抄』(元禄四年刊)、『伊勢物語絵抄』 年刊)と『年中重宝記』(同年刊) べき重宝記類には前記二書の他に『武家重宝記』(元禄七 な注を挿み込み、頭書部分に挿絵と注釈を半々に施したも あり、節用集類に『頭書大益節用集綱目』(元禄三年刊) や女房詞をも収めている『女重宝記』(元禄五年刊)、方言 いている。他に医学方面では『医学正伝或問』の注 ので、あまり注目すべき書ではない。その絵は丈伯自ら描 『正伝或問増補頭書』(天和二年(一六八二)刊)と『万 (同六年刊) などがあるが、本文の行間に読みくせと簡単 『世話用文章(世話字節用集)』 (同六年刊)などがある。一種の便利帳とでもいう て一項を設けている『男重宝記』(元禄六年刊) (同五年刊)、『篆字和玉篇 がある。古典の俗解書

いう名字が比較的珍しいこともあり、現在、名字や号が同一ましかし、後述するように、苗村丈伯については、「苗村」と

病回春』の俗解書『俗解龔方集』(元禄六年序刊)、漢詩の

伯と同一人物であるかを検討する。 苗村丈伯と苗村松軒について比較し、 にしてみたい。第二章では、 村丈伯についての再検討を行い、その経歴と作品をより明らか 整理されていないという問題点がある。そこで、 たは類似した複数の別人と混同されており、その経歴が正 第三章では、苗村丈伯と苗村介洞について、第四章では、 苗村丈伯 それぞれの章で、 (三径) と径山子につい 本稿では、 苗村丈 しく

一、苗村丈伯(三径) と径山子

苗村丈伯

(号は三径)と、寛文七年(一六六七年)

刊

時から、 太郎氏の「苗村丈伯の略伝 であると考えられていたことがわかる。これについて、大田栄 は、「六 理屈物語 五年(一六九二年)刊『書籍目録』第四巻「仮名和書」 いてである。『理屈物語』は、 の、『理屈物語』を著した径山子は同一人物かという問題に 『国語と国文学』第一一九号には、「(『男重宝記』序の)三径 『理屈物語』の作者である径山子は、苗村丈伯のこと 苗村丈伯作」と記されていることから、 附 序に「径山子序」とあり、 男重宝記と浮世鏡との比較 元禄 項 当 ぞ 0

> ず、 れていない。 きであろう。」とある。ちなみに、その理由については明記さ 章』(勉誠社 世文学書誌研究会 近世文学資料類従 参考文献編9『世話用文 作者附に拠りたるならんも『書籍目録』は必しも信ずべ 「「径山子」は「三径」に似ているが、 径山子が丈伯の別号なるや否やも確証なし。」とあり、 一九七六年)の小林祥次郎氏による解題には、 別人であると考えるべ 、から

討するべきであると考えられるので、筆者が改めてこの問題に 可能性については言及されていないという問題点がある。 の作者である径山子が、山本泰順と苗村丈伯のどちらでもない づいて、苗村丈伯のことであると結論付けており、 径)と苗村丈伯(号は三径)のいずれかであるという仮定に基 理屈物語 あるのに対して、『書籍目録』第四巻「仮名和書」 林』第二巻「仮字和書」項では、「六 理屈物語 屈物語』の作者について、延宝二年(一六七四年)刊『書籍題 作者考―山本泰順と苗村丈伯―」『国文白百合』 先に紹介した先行研究の中で、 山本泰順と苗村丈伯のどちらでもない可能性についても検 苗村丈伯作」とあることから、山本泰順(号は三 市古夏生氏の「『理 第六号は、 山本三径 項では、 『理屈物語 屈 物 理

か共通しておらず、 まず、号についてである。三径と径山子は、「径」 編集委員会・小学館国語辞典編集部 それぞれの意味も、 『日本国語大辞典』第 日 本国語大辞典 字し

せる『理窟物語』を丈伯の作とせるは、元禄の『書籍目録』の 館書店 一九三三年)「艸田子」項には、「諸書に径山子と署名一方で、鈴木行三氏の『戯曲小説近世作家大観』第一巻(中文

版

苗村丈伯―」『国文白百合』第六号では、

・筆跡等の検討により、

苗村丈伯のことであるとしている。

以下の通りである。

書目

·作者像·書

丈伯は、

別人である可能性があることが分かった。その理由は

ついて検討した結果、

[理屈物語]

の作者である径山子と苗

る。」とあり、

と云ふ名も理屈物語の径山子と関係的のものではないかと考へ

市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と

-77

す。」とあるように、特に関連性はない。

「(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞに(漢の蒋詡が庭に三すじの十二に、一つの一年)「三径」項には、二版 第四巻・第六巻(小学館 二○○一年)「三径」項には、

本に、筆跡についてである。市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村文伯―」『国文白百合』第六号では、古村文伯の作品の筆跡については別稿に譲るが、私見では、苗村文伯の作品の筆跡については別稿に譲るが、私見では、苗村文伯の作品の筆跡については別稿に譲るが、私見では、苗村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は詳される。本村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっている。古村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっている。古村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっていば、苗村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっていば、古村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっていば、古村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっていば、古村文伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっていば、古村文伯の作品の筆跡と『理団物語』の筆跡は異なっていば、古村文伯の作品の筆跡と『理団物語』の筆跡は異なっていていている。

次に、苗村丈伯と径山子の作品の内容についてである。現在は、私見では別人画である。
(であると考えられる二四作品のうち、挿絵がある一六作品は、であると考えられる二四作品のうち、挿絵がある一六作品は、次に、挿絵についてである。前述の通り、現在、苗村丈伯作

の本文を詳細に比較した結果、明らかに一致する箇所などは確物語』のみであるが、『理屈物語』の本文と、苗村丈伯の作品確認されている、径山子という号の作者が著した作品は『理屈

で、「苗村常伯 一作丈伯号介洞」とされたことが原因であると

あると断定することは難しい。

あると断定することは難しい。

のあると断定することは難しい。

のあると断定することは難しい。

の話が載っているという共れ、和漢の有名な諺の語源についての話が載っているという共れ、和漢の有名な諺の語源についての話が載っているという共れ、一個は言葉に関して特に興味を持っていたが、『理屈物語』に共同があると断定することは難しい。

といえる。 このことから、苗村丈伯と径山子は、別人である可能性があ

二、苗村丈伯と苗村介洞

述目録』 之四に出でたり。」と指摘し、さらに、 洞が混同された経緯について、中根粛治氏の『慶長以来諸家著 ず。介洞径は近江八幡の人にして、委しくは『近世畸 く別人にして、寛延元年に歿したるは介洞にして丈伯にあら 歿年を寛延元年とすれど、常伯と介洞とは親戚なるが如きも全 説近世作家大観』第一巻「艸田子」項でも、「『諸家著述目録 村丈伯と苗村介洞は混同されておらず、鈴木行三氏の『戯曲小 問題についてである。『日本古典文学大辞典』第四巻では、 七 「誤られたる重宝記の作者苗村丈伯」『書物展望』第一一五号 『大日本人名辞書』等には、常伯を苗村介洞と混同し、常伯の 四八年)の近江国の医師である苗村介洞は同一人物かという 次に、苗村丈伯と、 和学家之部 一九四一年一月)によって、苗村丈伯と苗村介 (青山堂支店 延宝二年 (一六七四年)~寛延元年(一 一八九四 同じく、鈴木行三氏の 年 「苗村常伯 人伝』巻

年)、滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八巻(蒲生郡 九一七年)、滋賀県教育会『近江人物志』(文泉堂 一之部、東京経済雑誌社『大日本人名辞書』(東京経済雑 考察されているが、 中根粛治『慶長以来諸家著述目録』 『大日本人名辞書』(東京経済雑誌社 九一七 和学家

書刊行会 一九四一年)、大田栄太郎「苗村丈伯の略伝二年)、関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』 宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一一九号、 附男重 大田栄 (東洋図 一九二

太郎「重宝記類と苗村丈伯 (道益)―武家重宝記の発見など―」

『書物展望』第一一三号などでは、苗村丈伯と苗村介洞が混同

苗村丈伯と苗村介洞は、別人であると考えられる。ここに改め 作者苗村丈伯」『書物展望』第一一五号で指摘している通り、 ことなどが原因であると考えられる。 されている。これは、いずれも「苗村」という名字であること 一戯曲小説近世作家大観』第一巻および「誤られたる重宝記の 苗村丈伯は医学書を著しており、苗村介洞は医者であった しかし、鈴木行三氏が

て理由を述べると、以下の通りである。

項には、 れており、 である『日本医譜』では、苗村丈伯と苗村介洞は別項で説明さ 儒林伝』 師であり作家でもあったという記述はなく、文化一五年(一八 世畸人伝』第四巻「苗村介洞 附 妻女」項には、苗村介洞が医ついての最も古い記述である、天明八年(一七八八年)刊『近 一八年)写の、古今の儒学者についての伝記である『芸苑古今 まず、当時の文献における記述についでである。苗村介洞に や、江戸時代後期頃写の、 『芸苑古今儒林伝』では、 日本の医者についての伝記 第二卷「苗村丈伯

> 苗 村丈伯 京師人師不詳

貞永式目首書 理屈物語 節用集頭

> 庭訓往来首書 女調法記 五.

正伝或問首書

年代記絵抄

七

弄方集

とあり、 絶句熟字訓解 第三卷「苗村介洞」 項には

和歌ヲ好メリ寛延元年戊辰十月二十三日卒ス年七十五六如 事務ヲモ漢文ヲ以テ筆記ス性豪爽ニシテ物ニ拘泥セス旁ラ 弱冠ノ時伊藤仁斎東涯ノ二先生ニ学ブヨク文ヲ属ス比日 和尚ハコノ道益ノ孫也 苗村介洞 苗村氏名道益号介洞近江八幡人世々医ヲ業トス

師として説明されている。 次に、没年についてである。『近世畸人伝』 第四 巻 苗村介

とあるように、苗村丈伯は京都の作家、

ことになるので、 が刊行された延宝四年 がある作品の中で、最も刊行年が早い作品である『聚分韻略 人物であった場合には、現在確認されている、苗村丈伯の署名 た人物であると考えられる。もし、苗村丈伯と苗村介洞が同一 は、延宝二年 (一六七四年)~寛延元年 (一七四八年) に生き いる。寛延元年(一七四八年)に七五歳であったということ 洞 寿七十有五、 附 妻女」項には、苗村介洞の没年と当時の年齢について、 寛延元年戊辰歳、十月廿三日也、」と記されて 適切な年齢ではない。 (一六七六年) には三歳であったという

このことから、苗村丈伯と苗村介洞は、

別人であると考えら

医 79

苗村介洞

は近江

玉 0

四、苗村丈伯と苗村松軒

下の通りである。

「「大き」とは、同一人物であると考えられる。その理由は以が、この二人は、同一人物であると考えられる。その理由は以用したように、苗村丈伯と苗村松軒は別人であるとされている

成』があり、作品名の付け方が類似している。宝記大成』がある。一方、苗村松軒の作品にも『伊勢物語大年)刊『男重宝記』の改題本である、江戸時代前期頃刊『男重年)刊『女重宝記大成』や、元禄六年(一六九三年)刊『女重宝記】の改題本である、宝永八年まず、作品名についてである。苗村丈伯の作品には、元禄五まず、作品名についてである。苗村丈伯の作品には、元禄五

兵衛画である。

存在する。 存在する。 存在する。 「松軒」に類似した号に変更されている伝本がが、その改題本である『女重宝記大成』には、序の署名が「枩が、その改題本である『女重宝記大成』には、序に「艸田寸次に、署名についてである。『女重宝記』は、序に「艸田寸

次に、筆跡についてである。西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌デ

(艸田斎寸木子)本に類似する」とある。(苗村松軒作)の改題本)項によると、「版下筆蹟は苗村丈伯ータベースの、江戸時代前期頃刊『廻国一夜宿』(『御伽人形』

であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半兵衛画であるといえ、『四郎に『絵師 京 吉田定吉」という署名がある)と、元禄六年(一六九三年)刊の、『百人一首』の挿絵入りの注釈書である『百人一首絵抄』(刊記に「絵師 京 吉田定吉」という署名がある)と、元禄六年(一六九三年)刊の、『百人一首』の挿絵入りの注釈書である『百人一首絵抄』(刊記に「京極四条 吉田半兵衛」という署名がある)の挿絵が全て収録されていることから吉田半兵衛画であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半年であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半であるといる。『一覧を持ていることが書であると考えられる。

書であるという点が共通している。 段に『徒然草』 段に『百人一首』の本文・挿絵・注釈を載せ、下段に 段に本文などを載せたものであるという特徴があるが、 村丈伯の作品には注釈書が多く、 語』などの本文・挿絵を載せた注釈書であり、『つれ 軒の作品である、 る二四作品中一四作品が、本文を二段に分け、上段に注釈、 (外題は「頭書絵抄つれ (~草」) は、本文を二段に分け、 次に、苗村丈伯と苗村松軒の作品の構成についてである。 の注釈を載せ、下段に本文・挿絵を載せた注釈 『伊勢物語大成』は、 現在、 本文を二段に分け、上 苗村丈伯作と考えられ 『伊勢物 苗

したように、「浮世草子『御伽人形』(宝永二年(一七〇五 『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項には、先に引用 次に、苗村丈伯と苗村松軒の作品の内容についてである。

比較した結果、本文の読点の打ち方や在原業平の伝記の記事に 年刊)を執筆している苗村松軒は、『伊勢物語』の両注釈書を 刊)や『伊勢物語大成』(元禄十年刊)、『首書徒然草』(同十一

というのは、元禄六年(一六九三年)刊の『伊勢物語絵抄』 方が妥当であろう。」とある。この「『伊勢物語』の両注釈書. (苗村丈伯編) と、『伊勢物語大成』 (苗村松軒編) のことであ

相違する点が少なからず認められるので、丈伯と別人と考える

例えば、『伊勢物語絵抄』における、『伊勢物語』第一段の部分 ち方については、市古夏生氏が指摘した通りに異なっていた。 の本文の比較を行ったところ、『伊勢物語』の本文の句点の打 ると考えられる。そこで、『伊勢物語絵抄』と『伊勢物語大成

第一巻三丁オ・ウ)は、 むかし。男うゐかうふりしてならの京

かすがの里にしるよし、て。かりにい

からすみけり。此男かいまみてげり。 にけり。その里にいとなまめいたる女。はら おも

心ちまどひにけり。男のきたりけるかり ほへず。ふる里にいとはしたなくて有ければ

男しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける ぎぬのすそをきりて。歌をかきてやる。其 かすが野のわかむらさきのすり衣 しのぶのみだれかぎりしられず

> もしろきこと、もやおもひけん となん。おいつきていひやりける。つゐでお

みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに みだれそめにしわれならなくに

ちはやきみやびをなんしける といふ歌の心ばへなり。むかし人は。かくい

という句点の打ち方であるのに対し、『伊勢物語大成』におけ

むかし。男。うゐかうふりして。ならの京。かす 『伊勢物語』第一段の部分(第一巻二丁オ・ウ)は

る

まみてけり。おもほえずふるさとにいとはした がの里に。しるよし、てかりにいにけり。其さとに いとなまめいたる。女はらから。すみけり。此男。かい

其男。しのぶずりの。かりぎぬをなん。きたりける りける。かり衣のすそをきりて。歌をかきてやる。 なくて有ければ。こ、ちまどひにけり。男の。きた

かすがのゝ。わかむらさきのすりころも。 しのぶのみだれかぎりしられず

となん。をいつきて。いひやりけるついでおもし

ろきことゞもや。おもひけん みちのくの。しのぶもぢずりたれゆへに。

といふ。歌の心ばへなり。むかし人はかくいちはや みだれそめにしわれならなくに

という句点の打ち方であった。 きみやびをなんしける しかし、 『伊勢物語』の本文以

外の部分(『伊勢物語絵抄』「伊勢物語作者之説」(第一巻一丁

— 81 —

オ)・在原業平と伊勢の伝記(第一巻二丁ウ)と、『伊勢物語大

し)・「在原なりひら伝記」(第三巻表紙見返し))については、 成 (第一巻一丁オ)・「伊勢御伝記」(第二巻裏表紙見返

本文の内容が一致または類似していた。例えば、『伊勢物語絵 の「伊勢物語作者之説」(第一巻一丁オ)には、

せ物語は伊勢の御の筆作せるゆへにいせ物かたりと云と

へどもなを説々有

謙退比興の詞と て歌はよまざりけれど元より歌の事はしらざりければさる て決し難しと定家卿の奥書にもみえたり其ゆへは此物語に

事しられたり又心中の へる事ありこれみな卑下の詞にてみづからの書作とい Š 歌のきたなげさよなど

るせりこれらの事 秘密とて二条后に来りかよひ斎宮にあひたりし事などをし

うへ朱雀院の 他人の推してしるしがたき事なれば業平の自記なるべし其

をやしかれども ぬりごめになり平自筆のいせ物かたりあるといふ説もある

かくれ給ひ 此物かたりの中に仁和の帝の芹河の行幸の事ありこれ業平 てのちの事兄の行平の歌をかけりかつ又此ものかたり業平

歌をかきて ず万葉集の歌など書まじへたる所々あまたなり其外にも古 歌のみにあら

作りものかたりとみゆる所もあれば又なりひらの自記のみ

にはあるべからす

されば古人の御説にもまづ業平自記の双紙ありしうへに伊

まく一の事を書そへて作り物語となして宇多院の皇宮七条

のきさき

と記されており、 温子のかたへ奉りしといふに決せり 在原業平と伊勢の伝記 (第一巻二丁ウ) に

は 親王と申桓武 ○業平は平城天皇の御孫阿保親王の五男なり母君は伊登内

天皇の御むすめ也淳和天皇の天長二年八月七日に生れ給ひ て同三年に阿保親王

表をとりて在原朝臣の姓を給ふ陽成院の元慶元年に右近衛

権中将に任ず在

原にて五男なるゆへ在五中将といへり又閑麗翁ともい

i n

十一日に十六歳にて元服せり家は三条法門のみなみ高倉の 仁明天皇承和七年三月

まき柱といふ物のよし鴨長明が無名抄にみえたり元慶四年 西に有その家づくりち

朝神仙伝にはなりひら 卒すと三代実録に有菩提所は大和の国石上の在原寺なり本 五月廿八日に五十六歳にて

の岩本の宮になり平 旦よし野の河上にのぼりて行がたなきよししるせり賀茂

をいはひて月をめで花をながめし古のやさしき人はこゝに 在原と慈鎮の歌有

○伊勢は右大臣内麿の末孫前大和守従五位上藤 原継蔭の む

すめ日野の元祖真

夏の玄孫にて七条后温子に宮つかへの女房也宇多帝の寵愛

を得て行明親王

をうめりよつて伊勢の御息所ともいふ也伊勢の御といふも 女御といふ事也家は二条

に伊勢寺とて有 東洞院に有墓は津の国能因が旧跡の古曽部といふ所のうへ

と記されている。一方、『伊勢物語大成』序(第一巻一丁オ)

は、

には、

▲此物がたりは伊勢の御の筆作せるゆへに題号をもかくい りといへど猶其こんげん決し

みればすでに死後の事ものせら がたきよし定家卿の御おくがきにみゆ又なりひら自作かと

本ともせよかしと定家卿の御説はしゆしやうの事なるべし たゞ其ことばつぎのをもしろき所をたふとみぶんほうの手 たりひつきやう其作者をいろく~とせんさくにをよばず

と記されており、「伊勢御伝記」 以下略

の玄孫にて七条后温子に 前大和守従五位藤原継蔭 伊勢は右大臣内麿の末孫 むすめ 日野の元祖真夏 (第二巻裏表紙見返し) には

> をうめりよつて伊勢の御息 のてうあひを得て行明親王 宮つかへの女房也字多の帝

女御といふ事也家は二条東 所といふ也伊勢の御といふも

能因法師が旧跡の古曽部 洞院に有墓は津のくに

といふ所のうへに伊勢寺

と記されており、「在原なりひら伝記」(第三巻表紙見返し) とて有

にて阿呆親王の五男也仁王 ▲業平は平城天皇の御まご

五十三代淳和天皇天長二年

四月一日ならの京にて生れ 元服は五十四代仁明天皇承和

七年三月十一日年十六才也

伊勢の伝記については、ほぼ完全に一致していた。 と記されている。傍線部が一致している箇所であるが、

ろ、『徒然草』序段の本文の句点の打ち方については異なって 作)と、『つれつれ草』(苗村松軒作)の本文を比較したとこ いたが、兼好の伝記については、『徒然草絵抄』の序 丁オ)では、 また、元禄四年(一六九一年)刊『徒然草絵抄』(苗村丈伯 「観応元年四月八日に歳六十八にて終焉せられ

ぬ存命の時より山背国双の岡といふ所にかねて墓をもうけかた

れ草 高野山 など、本文の内容に類似点があった。 岡のべにあわれいく世の春を過さんとよめり」と記されている をまふけてかたはらに桜をうへさけてちぎりをく花とならびの に位牌有墓はならびの岡に有べし家集にならびのをかに無常所 六十八歳にして為果しれたりといへり今におゐて高野 はらに桜をうへ辞世の歌をよみをかれたりちぎりおく花となら の岡 の序 一西光院又坂本の西教寺に有」と記されており、 のべにあわれ (第一巻一丁オ・ウ)では、「観応元年四 いく世の春を過さんと家集にみたり位牌は 山西光院 月八日に 一つれ 0

軒の最初の作品 えられ、【表一】に記載したように、苗村丈伯の最後の作品 (『武家重宝記』) このことから、 刊であることから、苗村丈伯は、元禄一〇年 以降は、松軒という号を用いていたと考えられる。 (『伊勢物語大成』) は元禄一〇年 (一六九七 は元禄七年(一六九四年)刊であり、 苗村丈伯と苗村松軒は、 同一人物であると考 (一六九七 苗村松

刊記に 署名があるも ると考えられる他の作品には、 図讃」とあることから、「その絵は丈伯自ら描いている。」とし 九三年)刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子 村丈伯」項では、元禄四年(一六九一年)刊 について考察してみたい。『日本古典文学大辞典』第四巻「苗 最後に、苗村丈伯は作家であり絵師でもあったかという問題 私見では吉田半兵衛画である。また、「 「洛陽処士 しかし、【表一】に記載した、 はなく、 艸田斎寸木子三径 『徒然草絵抄』と『伊勢物語絵抄』 挿絵に苗村丈伯画であるという 図讃」、元禄六年 現在、苗村丈伯作であ 図讃」という語に 『徒然草絵抄』の 二 六

禄六年(一六九三年)

刊『伊勢物語絵抄』の刊記に

|洛陽処士 図讃」、

然草絵抄』

0)

刊記に

「洛陽処士

艸田斎寸木

子三径

「徒

また、苗村丈伯については、元禄四年(一六九一年)

村丈伯はあくまで作家であり、 物であるという意味を表すものではないといえる。 説明されており、絵を描く人物とその画賛を書く人物が同 の余白に、 ついては、 る先行研究は誤りであると指摘したい。 年) に、 内容を補うように書き添える文章、 『日本国語大辞典』第二版 図讃」と類似した「画讃」という語について、 作家であり絵師でもあったとす 第三巻 (小学館 詩歌。 よって、 讃。」と 100

五、 おわりに

したような二四作品を著した。 家故実・年中行事などの様々な分野において、【表一】に記載 書・浮世草子・注釈・節用集・年代記・暦・医学・往来物 性の教養のための辞書である『女重宝記』 作家。号は三径・松軒など。元禄五年(一六九二年) すると以下の通りである。 を指摘した。以上の検討により、苗村丈伯の概要を改めて整理 洞とは別人であり、 ていることを確認した。そして、苗村丈伯は、 山子・苗村介洞・苗村松軒と同一人物あるいは別人と考えられ が同一または類似した複数の別人と混同されており、 て、「苗村」という名字が比較的珍しいこともあり、 本稿では、まず、 苗村松軒とは同一人物であるという可能性 苗村丈伯 苗村丈伯は、 (号は三径) 江戸時代前期の京都の は、 を始めとして、 径山子·苗村介 先行研究にお 刊の、 名字や号 11

	1										1	
				元禄五年(一六九二年)		元禄四年(一六九一年)	元禄三年(一六九〇年)		有実互手 (一つ)しま)	貞享四年 (一六八七年)	延宝四年(一六七六年)	刊行年
月	一二月	九月	七月	五月	四 月	月	四月	五 月	三月	六月	一二月	刊行月
『伊勢物語絵抄』	『錦繡段訓解 仮名付』	『古暦便覧備考』	『世話用文章』	『女重宝記』	『年代記大絵抄』	『徒然草絵抄』	『頭書大益節用集綱目』	『庭訓往来絵抄』	『庭訓往来図讃』	『籠耳』	『聚分韻略』	作品名
注釈	注釈	暦	節用集	辞書	年代記	注釈	節用集	注釈	注釈	浮世草子	辞書	分類
三径 図讃」 三径 図讃」	考」	「林印苗斎」 序「苗村丈伯三径 識」	序「艸田子 識」	序「艸田寸木子叙」	作) お名なし (『芸苑古今儒学名なし (『芸苑古今儒	寸木子三径 図讃」	跋「苗村丈伯跋」	によると苗村文伯作))署名なし(『書籍目録』	によると苗村丈伯作))署名なし(『書籍目録』	序「艸田斎書」	「三径」「林印苗斎」跋「林菴 苗村丈伯 識」	署名
〔吉田半兵衛〕画	挿絵なし	絵師不明	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画	第一巻~第三巻は 第六巻は〔吉田半 年本第三巻は	〔吉田半兵衛〕画	絵師不明	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画	〔吉田半兵衛〕画	挿絵なし	絵師
町 大文字屋七郎兵衛 真斎橋筋 秋田屋市兵衛・京押小路橋 江戸芝神明前 井筒屋忠左衛門・大坂	西条橋通万寿寺町舛屋 川勝五郎右衛	野家次郎兵衛・大和屋勘七郎 梓書林 大坂 伊丹屋太郎右衛門・京 吉	衛 梓 書林 貞節軒 烏丸通七観音町 佐野九兵	屋次郎兵衛 板行 大坝 伊丹屋太郎右衛門・京寺町 吉野 青林 江戸青物町万屋清兵衛・大坂梶	郎兵衛 合梓 京寺町 伊賀屋久兵衛・京寺町 吉野屋次 寺町 伊賀屋久兵衛・京寺町 吉野屋次 京寺町 古野屋次	青林 万屋庄兵衛·大文字屋七郎兵衛	書堂 津田氏宗智・山本五兵衛 同梓	衛	書林 山崎屋市兵衛・丸屋半兵衛 同梓	書林 田中庄兵衛・万屋庄兵衛 同梓	書肆 八尾勘兵衛彫刻	書肆

金や半右・せにや義	(一六九二年)刊『書	籍目録』によると苗村丈伯作伝本なし(元禄五年(一六五	医学	『正伝或問増補頭書』	不明	[元禄五年(一六九二年)
門・京五条高倉西へ入町 林孫兵衛江戸日本橋南壱町目 桝屋五郎右衛	〔吉田半兵衛〕画	序「苗村氏松軒子。或時 予か茅店を叩て序をせよ と訇て書を投込ぬ。是を 披てみるに。枩軒子が茶 技でみるに。枩軒子が茶 位怪談を記録し。御伽人 形と題号す。」	浮 世 草 子	[御伽人形]	三月	宝永二年(一七〇五年)
万屋庄兵衛 板	〔吉田半兵衛〕画	序「苗村枩軒」	注釈	『つれつれ草』	六月	元禄一一年(一六九八年)
衛・山口茂兵衛 吉田三郎兵衛・浅見吉兵	〔吉田半兵衛〕画	序「苗村枩軒」	注釈	『伊勢物語大成』	五月	元禄一〇年(一六九七年)
衛 板 衛・大坂真斎橋筋上人町 雁金屋庄兵京烏丸通六角下ル七観音町 佐野九兵	〔吉田半兵衛〕画	序「洛下 艸田子 識」	武家故実	『武家重宝記』	月	元禄七年(一六九四年)
刊記なし	〔吉田半兵衛〕画	序「洛下 艸田子 書」	年中行事	『年中重宝記』	月	
書肆 万屋庄兵衛板行	〔吉田半兵衛〕 画	(『近代著述目 録』などによると苗村丈 は作)	注釈	『御成敗式目絵抄』	七月	
七良 同梓 正条坊門通御所八幡之町 中川彦三三条坊門通御所八幡之町 中川彦三	〔吉田半兵衛〕 画	序「艸田子 三径 題」	辞書	『男重宝記』	六月	
京極五条橋詰町 田中庄兵衛梓	挿絵なし	序「艸田子」	往来物	『万案紙手形鑑』	五月	
書林 丸屋彦三郎刊	挿絵なし	序「苗村丈伯 識」	辞書	『小篆増字和玉篇綱目』	五月	元禄六年(一六九三年)
兵衛 不屋平兵衛・京寺町松原 菊屋七郎 筋 本屋平兵衛・京寺町松原 菊屋七郎	吉田半兵衛画	署名なし	注釈	『百人一首絵抄』	三月	
刊記なし	絵師不明	「三径」「林印苗斎」 序「苗村丈伯三径 序」	医学	『俗解龔方集』	三月	

辞典』 ることができるだろう。 了意や、好色本作家の坂内直頼などが存在する。このことか の啓蒙に貢献した作家としては、他にも、仮名草子作家の浅井 浪人になったが、その教養によって数多くの書物を著し、民衆 と考えられる。江戸時代前期において、何らかの事情があって れているので、生活のために文筆活動をしていた浪人であった って仕官しない人。在野の人。浪士。浪人。処子。」と説明さ 艸田子 三径 図讃」とあり、「処士」という語は、『日本国語大 苗村丈伯も、当時における作家のあり方の一例として捉え 第二版 第七巻(小学館 二〇〇一年)では、「民間にあ

していきたい。 今後も江戸時代前期の作家について、より具体的に明らかに

- (1) 元禄四年(一六九一年)刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 ら、苗村丈伯は、京都の作家であったと考えられる。 九四年)刊『年中重宝記』の序に「洛下 艸田子 書」とあることか 年)刊『武家重宝記』の序に「洛下 艸田子 識」、元禄七年 (一六 抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子 三径 図讃」、元禄七年(一六九四 艸田斎寸木子三径 図讃」、元禄六年(一六九三年)刊 『伊勢物語絵
- がよく売れていたことがわかる。 は。好色本か重宝記の類が増じゃといへば」とあり、当時、重宝記 汰」に、「当世はたゞかたひ書物をとり置て。あきなひの勝手に 世草子である『元禄大平記』第一巻第二話「京と大坂に本替の沙 元禄一五年(一七〇二年)刊の、当時の文化について批評した浮
- る。詳しくは、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一 五号(慶應義塾大学藝文学会 二〇一八年一二月)を参照。 現在確認されている、吉田半兵衛の署名がある作品は八作品であ

- (4) 井上和雄「元禄版『女重宝記』」『書物展望』第五九号(書物展望 に使つたものである。」と説明されている。 社 一九三六年五月 四五八頁) には、苗村丈伯の号について、「艸 る。即ち、艸田は苗、寸木は村であつて、苗村といふ姓の人が匿名 田寸木は、他に類例もある通り、二字を四字に分割したものであ
- 5 苗村丈伯の号。
- どである。 義直 『近世漢学者著述目録大成』 (東洋図書刊行会 一九四一年) な 生郡 『近江蒲生郡志』 第八巻 (蒲生郡 一九二二年)、関儀一郎·関 年)、滋賀県教育会『近江人物志』(文泉堂 一九一七年)、滋賀県蒲 東京経済雑誌社『大日本人名辞書』(東京経済雑誌社 一九一七 戸時代後期頃写『日本医譜』があり、明治時代以降では、中根粛治 代著述目録』、文化一五年(一八一八年)写『芸苑古今儒林伝』、江 ている書籍は、江戸時代以前では、文化八年(一八一一年)刊『近 『慶長以来諸家著述目録』和学家之部(青山堂支店 一八九三年)、 寛文七年(一六六七年)刊『理屈物語』を苗村丈伯作であるとし
- 7 吉田半兵衛画である。 水谷不倒 『古版小説挿画史』 (大岡山書店 一九三五年) によると
- 8 「径」は誤植か。
- 9 中根粛治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部(一六五頁)一苗 常伯」項

苗村常伯

理窟物語 一作丈伯号介洞

錦繡段熟字訓解

俗解龔方集 女重宝記五 貞永式目頭書

正伝或問増補頭書

10

と号す世々医を業とす儒を伊藤仁斎に学ぶ寛延元年十月廿三日歿 東京経済雑誌社『大日本人名辞書』(一二六一頁)「苗村常伯」項 一に丈伯と云ふ近江八幡の医なり通称は道益名は常伯三友又介洞

す年七十五、家訓往来頭書、貞永式目頭書、理窟物語、女重宝記

等の著あり(諸家著述目録、皇国名医伝(筆者注:正しくは 一 日

妻女」項

11 辞書』とする) 村介洞」項は、ほぼ同内容だが出典を『近世畸人伝』『大日本人名 村道益」項(滋賀県教育会『近江人物志』(四四九・四五〇頁) 滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八巻(八五五・八五六頁)

ずして真率なること道益に過ぐ、老後薙髪して貞信といへど世人 事既に遅しと与へずして去る、寛延元年十月二十二日(筆者注 雅を好み歌を能くす歿年詳ならず歳八十六辞世の歌に、 貞永式目頭書、理屈物語、女重宝記等あり、室駒井氏辺幅を修め を請ひしかば道益曰く門を出て、数百歩の客に饗を設くるが如し 夫謝して去る、一日重態の病者を往診して帰らんとす病家の人薬 往診も亦業なり、予が汝を慰めば汝も予を慰むべきなり如何と農 農夫を呼で曰く先に我を罵りしが汝が田を植ゆるも業なれば予が す、農夫水田に挿苗す道益言を交へずして過ぐ農夫之を罵る帰路 は漢文にて書せり、性豪邁にして無我なり一日近里の病者を往診 を業とす、道益若くして伊藤仁斎の門に入り学を修す平常其日記 苗村道益は八幡町の人なり諱は常伯添三友又介洞と号す家世々医 「二十三日」の誤植か)歿す年七十五、著す所、家訓往来頭書、 《雷と呼ぶ、これ其声四隣を圧し心の思ふまゝなればなり、性文

関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』(三五二頁)「苗村 あま小舟八十の湊を漕き過きて彼の岸近くなるそ嬉しき。

近江の人。医を業とす。兼て伊藤仁斎に師事し、経術の造詣深 名は常伯、一に丈伯、 し。寛延元年十月朔日没す、年七十二(筆者注:七十五の誤 字は三友、道益と称し、介洞は其号なり。

植)。(近江人物志)

家訓往来頭書

貞永式目頭書

天明八年 (一七八八年) 理窟物語 刊『近世畸人伝』 第四巻 一苗村介洞

附

するに物うくなれば、われ酔てねふたし、今ははや帰られ

女重宝記

13

うゝるも業也、吾医療に通ふも業也、われもし子を慰労せは、子 なしと誚る、老人これを聞ながら行過て、帰るさに又こゝを経る るを、此老翁さもせねば、農夫等つふやきて、彼れ八幡の道益礼 るにあふ、世のならはしに、苗う、るときは、行人労を慰して過 其口号も気象を見るへきものなれはこ、に挙、 るが如し、不可及と、終に出去る、これらにて、 しかは、日、既に門を出て数百歩行たる客のために、饗をまうく 又或家の請に応して、病人を診て速に去んとす、あるじ薬をこひ もまた吾をしかすべし、いかにと、農人得答へず頭を掻て退く、 来るに、曰、さきにわれをそしれり、子よくおもふへし、子か苗 時、田にある人をこまねこす、さすがにしる人なれは、田を出て ず、其一二をいはゞ、近村へ医療に行路程、農人の早苗を運び植 記す、性豪にして物にものとせられず、しかも無我なれは人憎 若き時は堀川伊藤氏に学ひて文学あり、 ○介洞は苗村氏、通名道益、 世々医を業として近江八幡に住す、 日々の事務をも漢文に筆 常の趣知べし、

悪蚤

腐綿丸、 捕渠計尽復防難、開戸偶然見月残、王猛手空憎爾点、幾回誤把

病中作

此作ありて後、いくほとなく卒す、寿七十有五、寛延元年戊辰

花欲辞枝看色移、丹炉還少有誰知、漢君衰晚豈無感、起感秋風

きくつしかたり出て、なきみわらひみ興に入、客座久して対 はいはで、妙雷と人よびしは、其声四隣にひゞき、心におも と主翁に過たり、老後薙髪して貞信といへりしかど、ある名 所へ人到れは、よろこびて茶酒をもてなし、昔今のことをか ふま、のことをうち出す人なれば也、あるひはつれく、なる 介洞先に妻有りて蚤く亡す、後妻其真率辺幅ををさめさるこ 十月廿三日也

ものもありき、今其二三を挙、 より文雅を好み師にもよらて歌をよまれしが、中には俊発の もかけさるのみ歟、戯に逆ひて長居するも有し、是もわかき よ、いざぐ~と催さる、類ひ、常にゆき、する人は馴て心に

あま小ふね八十の湊を漕過て彼岸近くなるそうれしき かしこしなかたのゝ草の露をしももらさて月の影やとすとは 同し枝をいかに時雨のふりわけて青葉か中に紅葉しぬらん は、こゝに追慕の筆をそむ、 おのれもかしこにありける日、長居せしまろうどの数なれ 享年八十六にして、身まかりなんとせしとき る、百千とせ行末長き春日哉、此時によめりしうた いはひ給ひて、連歌の一句を、親しく御筆を染て賜りけ 八十四といふ春、 かけまくもかしこき御方より、高き齢を

江戸時代後期頃写『日本医譜』第三編第二五巻「苗村介洞. 項

苗村常伯」項 苗村介洞

卷錦繡段熟字訓解貞永式目頭書絵♪□来絵入同首書節用集頭書女郡落合村博覧沿聞無所不窺所著看正伝或問増補頭書俗解龔方集八郡落合村博覧沿聞無所不窺所書 客設饗不可及也終出去其真率可祭 余農夫黙而去又到或家診病者速去其家請薬曰譬如為出門数百歩之 子向謂我其思之子之植苗業也余之医人亦業也余若労子則子亦応労 時必慰労之此翁不然農夫謂曰八幡道益不知礼翁聞之帰途招農夫曰 性豪強不拘物然無我故人不憎之嘗往療近村農夫植苗風俗行人植苗 名道益号介洞世業医住江州八幡又学堀川伊藤氏筆記雑事必以漢文 名丈伯又称文安江州彦根人仕井伊侯為侍医有故致仕隱同州野洲 苗村常伯 一丈伯

堂 吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛」、元禄一一年(一六九 八年)刊『つれつれ草』の刊記に「万屋庄兵衛板」、宝永二年(一 元禄一〇年(一六九七年)刊『伊勢物語大成』の刊記に「洛陽書

重宝記理窟物語元禄中人乃益夫戚族也

れる。 は、京都の書肆の近くに住んでいた、京都の作家であったと考えら 郎右衛門・京五条高倉西へ入町 林孫兵衛」とあるので、苗村松軒 七〇五年) 刊『御伽人形』の刊記に「江戸日本橋南壱町目 桝屋五

16 国立国会図書館蔵

考えられる。 せる所なり」とあることから、坂内直頼(号は山雲子)作であると 勢物語抄』の扉に「伊勢物語首書抄は坂内氏山雲子初心のために作 体には署名がないが、初版本である延宝二年(一六七四年)刊『伊 貞享二年(一六八五年)刊『伊勢物語絵入読曲』は、この作品自

子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一号(人間文化研 間書院 一九七四年)、坂内直頼については、塩村耕「俗学者 山雲 究機構国文学研究資料館学術資料事業部 二〇〇〇年九月)を参照。 浅井了意については、北条秀雄 笠間選書11『新修浅井了意』

18

(いしだ・れいな